

## 多様性と対話がある学校文化が 枠にはまらない生徒の主体性を育む

諫早高校  
(長崎・県立)

県内屈指の進学校である諫早高校。受け身な面もあった生徒たちは今、校内外で活発に活動するようになり、文化祭や体育大会のような大きな学校行事も生徒の手によって生まれ変わりつつあります。こうした活動の根底にある主体性は、同校でどのように育まれるのでしょうか。

取材・文／藤崎雅子

### 実践のKeyword

- 🔍 発展途上にある若手社会人の講演会
- 🔍 多様性に出合う対話
- 🔍 生徒に時間を預ける
- 🔍 アドミッション・ポリシー研究
- 🔍 PDCAツール
- 🔍 偏差値抜きのキャリア検討会
- 🔍 場つなぎ・人つなぎ

### 生徒のもつ力を 存分に引き出したい

長崎県立諫早高校の生徒にインタビューすると、その圧倒的な主体性に驚かされる。「自分から勉強する」「わからないことがあれば質問する」といった狭い意味のものではない。問題意識をもって自ら立ち上がり、学校を飛び出して人とつながり活動し、うまくいかなかったも仲間と対策を考え乗り越える——同校が目指し、実際に生徒のなかに育まれているのは、そんな、枠にとらわれず発揮される主体性だ。このような生徒の姿は、かつての同校ではあまり見られなかったという。同校は県内有数の進学実績で知られる伝統校で、校是「文武両道」の下、生徒は勉強と部活動に一生懸命に取り組んできた。しかし、5年前に進路指導主事に就いた後田康蔵先生は、そこに物足りなさを感じていた。「真面目だけれど指示待ちの傾向があり、学校の中で小さくまとまっている印象がありました。本校生徒たちはもっとできる。それぞれの力を存分に伸ばし、これからの社会で多様な人々と協働し新しい価値を生み出していくことができるようにしたい」と考えていました。

### 時間と機会を預ければ 生徒は自ら伸びる

そんな同校が変わるきっかけとなったのは、2016年に進路指導部が始めた「グローバル講演会」だ。これまでにない形式にしようと、90分間の講演のあと、希望者

対象に少人数グループの対話によってテーマを深める120分間のワールドカフェを行うという二部構成で開催した。「グローバル」を同校は「多様性」と捉えており、グローバル講演会という名称には、世界で活躍する講師に学ぶことだけでなく、対話

図1 「主体性・コラボレーション・チャレンジ」に基づく活動の見直し

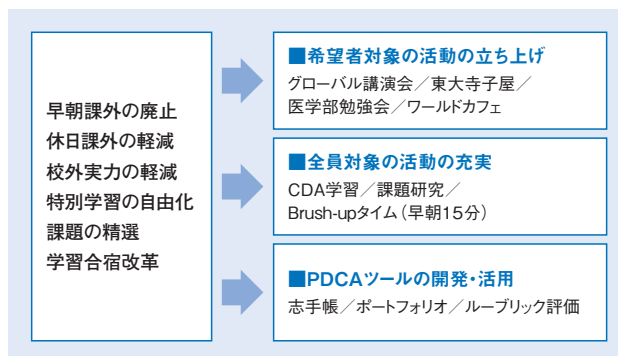


図2 活動の見直し基準

- 主体的スタートで始まったか?
- 選択の自由はあったか?
- 機会を奪っていないか?
- 生徒に時間を返しているか?
- 多様性は確保しているか?  
→対話とシェア
- 入念な計画(やりくり)を立てさせているか?
- 大学合格することだけが目標になっていないか?  
→キャリア形成
- 必要な失敗をさせているか?
- 社会との関わりをもたせているか?  
→アウトソーシング
- 机上の空論(理想論)で終わっていないか?  
→社会に有意な活動をしているか?



### School Data

1911年設立／普通科  
 生徒数828人(男子413人・女子415人)  
 進路状況(2019年3月卒業生)  
 大学230人・専門学校10人  
 就職1人・その他26人  
 長崎県諫早市東小路町1-7  
 TEL 0957-22-1222

### Outline

校訓「自立創造」～高い志を抱いて自分の人生を自分の力で切り拓く～の理念のもとに、人間性を豊かにして徳、知、体の調和のとれた社会に有為な逞しい人間の育成を目指し、校是「文武両道」の実践に取り組んでいる。2010年に附属中学校を開校し、長崎県では3校目となる併設型中高一貫教育校となる。卒業生の進路は、国公立大学をはじめとする大学への進学が中心。



生徒会主任  
 すががわ  
 砂川一真先生



3学年主任  
 たかひら  
 高比良周一先生



進路指導主事  
 うしだ  
 後田康蔵先生

を通じて教室の中にもある多様性に気づいてほしいという意味も込められている。

第1回の講師は、発展途上国の支援に取り組み30代前半の女性だった。まず、講師が語る解決したい課題に対する熱い思い、悩みながら現在も挑戦し続けている経緯に、生徒は釘付けに。高揚感はそのまま後半のワールドカフェに引き継がれ、当初の予定を大幅に上回る人数が参加し、活発な意見交換が行われた。「生徒はここまで話せるのか」。その様子は、教員の想定を上回るものだったという。

さらに教員を驚かせたのは、「こんなに刺激的な機会を単発で終わらせたくない」と生徒が教員に働きかけ、「グローバル講演会」を企画・運営する生徒チームを立ち上げたことだ。以後、年2〜3回のペースでグローバル講演会が開催されているが、第3回からは生徒チームが講師の人選から依頼交渉、当日の運営、次回に向けた改善まで行っている(Close up)。

「他者との対話を通じた多様な価値観との出会いが大きな刺激となる」と、そうした機会があれば生徒は自ら伸びていくことを実感。学校を生徒が自由に活動できる環境にすることが必要だと気づきました(後田先生)

**学校が提供する取組を見直し生徒に時間を預けることから**

このグローバル講演会の手応えから、進路指導部と学年団が連携し、キャリア教育を軸とする学校改革に着手した。目指す生徒像のキーワードとして、「主体性」

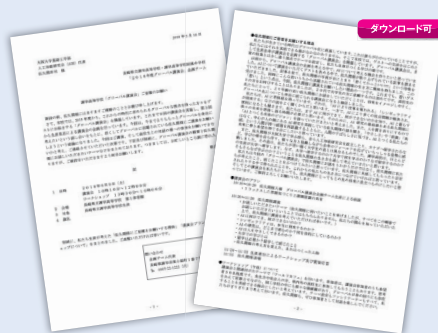
### Close up グローバル講演会



グローバル講演会企画チームのランチミーティングの様子。講演テーマおよび講師の選定、講師への依頼文作成、生徒に向けた広報活動、プログラム考案、当日の講師対応や運営、ワールドカフェのファシリテーター、次回改善のための振り返りなど、すべての行程を教員や外部ファシリテーターに助言を仰ぎながら生徒が行っている。



前半の講演の様子。既に成功を収めた人の素晴らしい体験談ではなく、もがき、悩み、失敗しながらも挑戦を続ける姿から刺激をもらうことをねらいとし、さまざまな分野で活躍中の若手を講師として招いている。これまで招いた講師は、途上国の子どものための教育支援を行うNGO創業者、人工知能などの科学技術で争いのない世界の実現を目指す認知科学者、世界中の孤児院やスラムの子どものためにミュージカルを創る活動を行うNPO代表など。



講師を推薦した生徒が気持ちを込めて作成する登壇依頼文。その内容に感動し、予定をキャンセルして駆けつけた講師もいるという。



後半のワールドカフェでは、「グローバル社会を生きる力とは」「世界を変える人とは」「なぜ働くのか」など、講演内容に関連したテーマについて、講師も交えて意見を交わす。希望制だが、最近では約80人が参加する。



「ラボレーション・チャレンジ」の3つを設定。これをより具体的に示した10項目を判断基準とし、学校のさまざまな取組を見直した(図1-2)。

まず行ったのが、学校による拘束時間

を減らし、生徒に時間を預けることだ。伝統的に早朝や休日には課外講座、校外模試などが数多く実施されていたが、生徒が受け身になるものは廃止あるいは軽減に踏み切った。膨大にあった自宅学習の課





■文化祭

地元飲食店と協働でブースを出店。「飲食店を呼ぶ意味は何か」「訪れた人は何をすることができるのか」などを議論し、地元産品であるじゃがいもの認知度を上げることを目的として取り組んだ。

「全員一律に行うものは減らす一方で、希望者を対象とする講座や課題は充実させ、自ら望めば高水準の学びができるようにしています」(後田先生)

増えた自由時間を生徒が主体的に活用できるように、「主体性・コラボレーション・チャレンジ」につながる学びは拡充した。その代表的なものが、前述のグローバル講演会、総合的な探究の時間、展開する「課題研究」(探究)、早朝や課外授業の時間で志望理由書や小論文にもつながる複眼力や表現力の育成を目指す「CDA学習」(Comprehension・理解・Discovery・発見・Ambition・大志)などだ。例えばCDA学習では、1・2学

図3 各学期末に生徒が取り組む自己評価表

ダウンロード可

観点	S	A	自己評価	評価理由・具体的な取り組み
授業	各教科の授業内容を十分に理解し、授業の中では、より深い学習で「質問する」「話し合う」「実習する」などできる。活動積極的に参加し、しっかりと習得できた。	各教科の授業内容をほぼ理解し、授業先生の話をよく聞き、わからないことがあったら積極的に質問し、質問したことで、自分の理解が深まった。	満足	
家庭学習	長期的、短期的学習計画を主体的に立て、毎日欠かさず、予習、復習、課題に加え、自分の苦手な科目へのテーマ学習も積極的に進めた。	指示された課題などを理解し、自分の成長のために積極的に取り組んだ。1日でも、3時間の学習を継続できた。	満足	
総合的な学習の時間	活動の意義や目的を理解し、積極的に活動した。活動では、興味、関心があることだけでなく、知らなかった、体験したことがなかった分野についても積極的に学び、対話により自分の可能性や選択を広げることができた。ポートフォリオにより、自己を振り返ることが成長につながった。	毎週、指示された活動に真剣に取り組むための対話が、自己の可能性を広げることができた。活動がポートフォリオに活かされた。	満足	
学校生活	時間や規律を守ったり、自分に与えられた役割を果たすだけでなく、学校や学級をよくするために、新たな企画や活動に主体的に参加した。	時間や規律を守ることでできた。時間や規律を守ることができた。集団の一員として協力を果たすことができた。	満足	
部活動・課外活動	自己を成長させるために、テーマや目標を設定し、毎日、積極的に活動した。また、周囲との対話により、リーダーやアシスタントとして、部や団体を引っ張ることができた。	課外活動が行われる日は毎日参加し、成長のために努力した。また、集団の役割を果たした。	満足	
主体性	志士魂を毎日、有効に活用するだけでなく、活用方法を自分なりに工夫し、自己管理に努めた。また、常に問題意識を持ち、自分の意志で、行動に挑戦した。	志士魂を継続して活用しながら、自己管理に努めた。また、自分の意志で、1度は挑戦した。	満足	
コラボレーション	異年齢や異性、校外など、活動の範囲を積極的に広げ、対話を通じて、一人では、果たすことができなかった課題を解決することができた。新たな成長を遂げることに成功した。	関心の持たれた仲間やチームメイトと協力し、対話を通じて、一人では、果たすことができなかった課題を解決することができた。新たな成長を遂げることに成功した。	満足	
チャレンジ	自分の苦手なこと、未体験のこと、校内外を問わず積極的にチャレンジした。その結果、自分の成長を遂げることに成功した。新たな課題を見つけ積極的に活動した。	勇気を出して、自分の苦手なことに挑戦した。その結果、自分の成長を遂げることに成功した。新たな課題を見つけ積極的に活動した。	満足	

年で志望校のアドミッション・ポリシーを読み解き志望理由書を書いてみるという学習を始めた。各大学のアドミッション・ポリシーには現代社会で求められる資質・能力が反映されている。「創造性」や「課題解決力」といった抽象的な言葉が目立つが、それはどういう意味なのか、自己の経験を踏まえた言葉に置き換えて書くことで自分事化を図る。

「受験対策ではなく、高校生活を送るうえで、将来求められる力を意識してもらうことがねらい。やってみようと思ったことにチャレンジする意味付けや後押しにつながればと考えています」(後田先生)

さらに、自由な時間のなかで自らPDDC Aを回してステップアップできるよう、振り返りツールの活用も進めている。生徒の声を取り入れてオリジナル手帳を開発し、日々の計画設計や振り返りを推進。そして、学期ごとに2種類の振り返りに取り組む。一つは、目指す生徒像に基づくルーブリックで、授業や家庭学習など5つの場面と、キャリア教育のキーワードである「主体性・コラボレーション・チャレンジ」の3つの観点について、4段階で自己評価する(図3)。もう一つは、自分自身の変化と成長を見つめるためのポートフォリオで、各学校行事を振り返って気づきや気持ちを書き記し、保護者や担任などの他者評価ももらう。

「勉強や部活動に忙しいなか、プラスアルファの活動に主体的に取り組んでいくためには、こうしたツールも活用し自ら時間やパワーをやりくりしていくことが大切です」

(後田先生)

こうした取組の見直しは、教員の負担の軽減にもつながっているという。

「削減したのは教員主導の取組、拡充したのは生徒主導の取組です。例えば、新たに始めたグローバル講演会も、当日は講師対応から運営まですべて生徒が行うので、教員は忙しくありません。総じて教員の負担は減っているのではないのでしょうか」(後田先生)

**生徒を多面的に見て支援する 偏差値抜きの「キャリア検討会」**

昨年度からは、校内外で活発化する生徒の活動状況について教員間で共有しキャリア支援していくことと、1・2学年の各学年団で「キャリア検討会」を始めた。従来から志望校決定のために実施している「進路検討会」とは、明確に趣旨が異なるものだ。この場で偏差値や成績の話は一切NG。生徒一人ひとりについて、志望校、校内外における活動履歴、ルーブリックによる自己評価の推移、資質・能力ベースのアセスメント評価の推移などを基に、どのような将来を目指し、どんな課題意識をもって校内外で活動しているのかを共有。さらに活動を充実させるために何が必要かを話し合う。そして、その生徒の問題意識ややりたいことの方向性に合う機会を紹介する。場つなぎや、近い活動をしている生徒同士をつなげる、人つなぎ、などの働きかけをしている。

「テスト結果や授業中の姿は、生徒の二面にすぎません。キャリア検討会を行うにあ

たっては、日頃のコミュニケーションや事前の面談などから、生徒が何を考えてどんな活動をしているかを掘り起こす必要があります。これを始めたことで、われわれは普段から生徒を多面的に見ようという意識が強くなったと感じます」(後田先生)

**生徒が2大行事の改善案を学校に提案**

こうした改革による生徒の成長を象徴する動きがあった。改革を推進してきた後田先生、3学年主任・高比良周先生、生徒会主任・砂川真先生らが、その第段階のゴールとして思い描いていたのは定型化されたプログラムが毎年繰り返されてきた文化祭と体育大会が、生徒の手で変わることで、その大きな岩がようやく動き始めたのだという。

「学校とは何かを与えてもらうだけの場ではなく、生徒自身で価値を作る場であり、学校行事も自分たちで意味づけするもの。さまざまな取組を通して伝えてきたメッセージが生徒に根付いたとき、この2大行事のやり方に、自ら疑問をもち立ち上がるはずだと考えました」(高比良先生)

生徒会は昨年度、文化祭の意味を改めて話し合い、開催期間を2日間に増やして、多彩な活動や学びを生徒同士で共有できるようにすることを校長に提案し、実現させた。さらに今年度は、「来場者も楽しく学べる」というコンセプトを掲げてクラス展示を工夫し、地元飲食店と特産品のジャガイモを使った商品を提供するという新たな試みも行った。

グローバル講演会企画チームの5人に、  
高校生活で学んだことや自身の成長を聞きました。



### 自分の思いを大切に行動

言いたいことがいっぱいあるのに、思いばかり先走って内容がぐちゃぐちゃになり相手に伝わらない、ということがよくあります。それで中学生の頃は消極的になっていたけれど、高校では「やりたいことをやろう」とグローバル講演会企画チームに入りました。初めて関わった講演会では、講師の方に対する私の思いを認めてもらい、いきなり総監督(講師との折衝担当)に。最初は戸惑い、悩みながらも、メンバーと共にやりきることができました。私にとってはこれが大きな自信になり、興味ある社会問題について大学の先生を訪ねるなど、自分の思いを大切に少しずつ行動できるようになってきたと感じています。(2学年・森 那津実さん／写真後列左)

### 型にはまらない自由さのなかで臨機応変に

小さい頃からリーダーになる機会が多かりましたが、中学生までは決められた型を崩さずやることを求められていたように感じます。でも、グローバル講演会には型がなく、毎回アイデアを出し合って企画、運営しています。ワールドカフェのテーマは事前にめちゃくちゃ時間をかけて決めるのですが、当日の講演を聞いて「なんか違う」と感じたら、直前に仲間と話し合いテーマ変更することも。既に決定したことを変えるのはすごく怖いけれど、それがみんなにとって少しでも良いことなら変えていこう。そう臨機応変に考え、行動できるようになりました。(2学年・塩釜 凜さん／写真後列中央)

### 対話を通じて多様な考え方に触れる

この学校の良さは「対話」があること。友達とは、どうでもいい話もするけれど、対話ができる関係性があります。みんなと話す、一人では思いつかなかったような考えが浮かぶこともあって、自分の中に眠っているものが引き出される感じがします。また、自分と違う考え方に対して寛容になりました。みんなそれぞれ得意分野があるんだと感じますが、僕の得意はというと、数学です。それを活かして、将来は社会課題を解決するような画期的なAIを作りたい。そして、グローバル講演会に講師として呼ばれたいですね。(2学年・林田直樹さん／写真後列右)

### 協働するからこそ得られる価値を実感

「高校に入って変わったね」とよく言われます。以前は友達付き合いが得意ではなく、グループでやるべきことも「自分でやったほうが早い」と一人で背負っていました。でも、高校ではさまざまな場面で意見を出し合ったり役割分担したりするなかで、少しずつ意識が変化。体育大会で使うクラスの幟の製作担当になったときは、「クラスメイトを頼ってみよう」と歩み寄ることができました。みんなで協力して作った幟は、見事コンテストで優勝。中学時代も得意の美術で表彰されることは何度かあったけれど、これまでとまったく違う喜びを感じました。(2学年・岸川莉子さん／写真前列右)

### 主体性とは、一歩を踏み出す勇気だと思う

グローバル講演会にお呼びした講師の方とは、講演後もつながりを絶やさないようにしてきました。そのなかで多くの刺激を受け、校外活動を始めたり、興味のあるNPOの方に会いに行ったり、自分から世界を広げられるようになりました。そんな経験から思うのですが、主体性とは、「やりたいことに一歩を踏み出す勇気」ではないでしょうか。高校生活を振り返ると、その勇気を出せるよう、先生方が環境を整え、機会をくださったからこそ、自分の成長があったのではないかと感じています。(3学年・山西咲和さん／写真前列左)

同校が長期的に見据えるのは、すべてが生徒の自治によって進む学校だということ。そのために、「われわれ教員も生徒の変化についていき、能力を引き出せる教員集団づくりを目指していきます」と後田先生。今後同校は前進を続けていく。

生徒に主体性が育つ理由は、「このイベントがあるから」とピンポイントで示せるものではない。生徒、教員、学校を取り巻くさまざまな環境を含め、学校の文化が変わったからといえる。

「教員の役割は、目の前の生徒によって変わるものです。今、本校教員には、あるべき方向に向かって先頭に立つて生徒を引っ張るのではなく、生徒の中にある思いや活動を引き出しメタ認知させ、社会や進路とつなぐ役割が求められるようになりました。先生方は、それを生徒から敏感に感じ取り、それぞれ対応を図っています。そのことが「一層生徒の成長を後押ししているのではないだろうか」(後田先生)



### ■ 体育大会

入学時から「対話」に力を入れてきた3学年は、今年度、体育大会の見直しに立ち上がった。伝統競技である仮装については「実施すべきか」から議論し、各クラスが創意工夫して取り組んだ。

「実は、協力店には一度断られたんです。しかし生徒は、それで諦めるのではなく、より良い案を練り直して再度交渉にあたり、最終的に当初の想定を上回る活動になりました」(砂川先生)

体育大会については、今年度、競技者だけでなく、応援する生徒や保護者、地域の方などその場を共有するすべての人が楽しめるものにしようと、実行委員会のあり方やリーダーの役割から見直した。学年全体で何度も議論して改善した競技もある。

「生徒たちが体当たりで作り上げたものには、無骨で至らない部分もあったか

と思います。しかし、学校側がお膳立てして表面上きれいに仕立てたものより、ずっと迫力がある良いものになりました」(高比良先生)

生徒の活動の舞台は校外にも広がっている。地域や海外でのボランティア活動、国際コンテストなどに積極的に挑戦する生徒が増加。社会課題の解決に向けてチームを立ち上げ活動する例も少なくない。例えば、教育学部志望者を中心とする有志生徒たちは、新しい教育のあり方を考える会を企画し、他校生も集めて開催した。また、昨年度、校内の女子数人が起点となつて他校生徒と共に作った中高生団

体では、地域おこし、国際協力、中高生が輝ける校外の場所づくりという3つの柱を掲げ、国際交流イベントでのフェアトレード商品の販売や、プロの野菜ソムリエと協働による地域グルメの開発、商品化などに取り組んでいる。

「生徒は教員の想定をこえて、びっくりすることを次々始めている。嬉しい驚きの連続です」(後田先生)

改革当初、教員間で「主体性とは」の認識が異なっていたり、早期補習をやめるこ

### 生徒の変化がてこになり 教員が自らの役割を見つめ直した

とに対しては「学力が落ちたらどうするんだ」との反発があったりもした。そんななか、影響範囲の少ない課外の時間を見直すことから始めた改革によって、まず生徒が変わり始めた。それが卒業生の進路先での活躍に表れ、これまで進学実績ばかりが目まされてきた同校に対する地域の見方が変わり、入学者の志望理由の多様化にもつながった。そして今、教員の意識や指導のあり方も、自然なかたちで変わっていく。